

論文要旨

Sherman Alexie は語りなおす作家である。短編 “This Is what It Means to Say Phoenix, Arizona” (1993) は *Smoke Signals* (1998) として映画化され、*Flight* (2007) は *Indian Killer* (1996) の問題点への回答として語りなおされている。最近では、*The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian* (2007 以後 *ATD* と表記) が新たに未発表の章を追加される形で再出版されている。Alexie は作品間の語りなおしのみならず、*Indian Killer* のように既存する先住民捕囚物語を先住民の目線で書き換えたり、*Smoke Signals* のように、主人公は主に白人男性であるロード・ナラティヴを、先住民青年を主人公に据え替えて語りなおしている。さらには、一つの作品の中で作中に登場する道具を異なる文脈で用いることで、それぞれの持つ意味を変奏し、物語の印象を変えたりもする。Alexie の作品は重層的な語りなおしによってできていると考えられる。

この Alexie 文学の基盤とでもいうべき「語りなおし」は、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件（以後 9.11 と表記）を境に、作風の変化という形でより顕著となる。この作風の変化については様々なところで指摘されているが、一体どのように変化しているのかを、彼の作品を統合的に分析した上で「語りなおし」として具体的に論じた論文は、論者の知る限り見当たらない。本論文は、Alexie の作風に大きな変化をもたらした 9.11 を分水嶺として、彼の「語りなおし」を検証する。「語りなおし」が 9.11 前後の作品間でどのように行われているかに着目し統合的に検証することで、指摘される作風の変化の詳細を明らかにし、彼の文学がどのような方向に向かおうとしているのかを提示する。

第1章は、アメリカ先住民文学の系譜を概観した上で、Alexie がその系譜の中でどのように位置づけられ、どのような点において特異な存在であるのか、また彼の作品において鍵となる保留地がどのような場所であるのかについて論じた。

基本的に文字を持たない先住民にとって、物語は口承で伝えられるものであった。19世紀になって彼らは英語を用いて物語を書き始めるが、先住民の書いた物語が文学として認知され始めるのは、1960年台後半の先住民ルネッサンス以降のことである。

本章が参考にした Paula Gunn Allen の分析によれば、先住民文学は3つの波

に分けられ、Alexie は第 3 波の作家に当たる。伝統よりもポップカルチャーまたポストモダン的な要素を積極的に取り入れるというのが彼の作品の技巧的な特徴であるが、先住民文学において彼を特異な存在として際立たせているのは、彼の保留地の認識の仕方であった。従来の先住民文学において、保留地は「帰る」故郷であり、先住民としてのアイデンティティを確かにする場所である。しかし、Alexie にとって保留地は「出る」場所であり、故郷でありながら同時に個人を幽閉する牢獄であった。彼はこの認識を維持したまま、異なる文脈において保留地を語りなおしその意味を変奏する。彼の作風の変化は語りなおしによってもたらされると考えられる。

第 2 章では *Reservation Blues* を題材に、保留地に生活する先住民の若者が、アイデンティティ探求の過程において、なぜ都市での生活を選択するに至るのかを考察し、異文化との接触による「語り」の再考を通して Alexie が現代先住民のアイデンティティに関して何を言おうとしているのかについて議論した。

グローバル化する現代において、アイデンティティ探求を人種に依拠することは難しい。先住民は白人の入植以来、西洋の価値観を強要されたが、彼らはそのような影響下で先住民としてのアイデンティティを模索し、白人もまた程度の差はあるが先住民側からの影響を受けている。支配、被支配の関係性の違いはあれ、彼らは互いに影響を与え合っており、両者のアイデンティティの探求には独自性と共に共通性があると考えられる。アイデンティティ探求に必須な先住民の「語り」は、征服者の言語である英語に拠らざるを得ないという意味でハイブリッドなものである。このような先住民の「語り」に関して想起されるのが、黒人奴隷がブルースという声を獲得していく過程である。

Reservation Blues においても保留地の語り手は、突然の来訪者 Robert Johnson がもたらしたブルースを通して、生き延びるための新たな物語を模索する。ブルースは、保留地において歴史的に忘れられながらも蓄積し続けた先住民の悲しみの物語を語るものだが、保留地の先住民はその事実を受け入れることを拒否し、主人公を共同体の調和を乱す者として疎外する。保留地は共同体の同質性を重要視するあまりに、異端に排他的であり、個人の声で語ることを許さぬ場所なのである。*Reservation Blues* の主人公は物語ることのできる場所を求め、保留地を出る。このようにして Alexie の描く先住民のアイデンティティ探求先は、保留地ではなく多様な声が交雑する都市に求められることとなる。

第 3 章では、都市を舞台として描かれる *Indian Killer* が、先住民側から見た

捕囚物語、つまり逆捕囚物語となっていることに着目し、主人公 John Smith は何に捕囚され、自死という彼のアイデンティティ探求の悲しい結末が一体何によってもたらされているのかを明らかにしようと試みた。

捕囚物語は、入植の過程で先住民に捕らわれたピューリタンの白人が、解放された後に記した体験記である。逆捕囚物語において先住民を捕囚するのは都市であり、そこに蔓延する白人による先住民の物語である。*Reservation Blues* において多様な物語が交雑する場所とされた都市にあるのは、白人に声の主体性を奪われた先住民についての物語なのである。現在、都市在住の先住民の人口は70%以上に達しているが、このような状況の背景には、連邦管理終結政策と先住民都市転住政策、そしてインディアン養子プロジェクトという連邦政府が行った政策がある。どれも名目は先住民救済であるが、結果的に先住民にもたらされたのは救済ではなく、都市における貧困と孤独である。主人公の John はインディアン養子プロジェクトの犠牲者として描かれる。彼はアイデンティティの問題を抱え込み、意図的に先住民になろうとする。しかし、彼が持つ先住民についての知識は白人が先住民について語った書物から得られたものであり、現実の先住民像とは異なるものである。John はこの齟齬に葛藤するも、彼自身が自分の言葉で先住民としての物語を語ることはできない。彼は白人の声に邪魔され発声できない怒りと苦しみを、白人でありながら先住民についての物語を描く Jack Wilson を殺害することで解消しようと試みるが、その試みが遂行されることはなく、自死を遂げる。都市はその成り立ちから白人の場所であり、そのような場所で先住民の声は主体性を奪われ抑圧される。都市において先住民は幾重にも重なる捕囚状況に置かれているのである。捕囚物語は “Separation (abduction), Transformation (ordeal, accommodation, and adoption), and Return (escape, release, or redemption).” の行程を辿るが、Alexie の逆捕囚物語が辿るのは “Separation, Confusion, and Death” という悲しいものである。*Indian Killer* が提示するのは、先住民の主体的な語りと、人種に依拠しないアイデンティティ探求の必要性である。

第4章では *ATD* を *Reservation Blues* を語り直した作品として捉え、*ATD* と *Reservation Blues* がどういう点で異なっているのかを、主人公 Junior の体験を分析することを通して明らかにし、その違いが主人公の自己同定にどのように影響しているのかについて検討した。

ATD は再び保留地を舞台とし、Junior は *Reservation Blues* の Thomas 同様、

保留地とその外の世界を往来することを経て、将来的には保留地の外に出る決意をする。*Reservation Blues* は好評を博しながらも先住民系の批評家から痛烈に批判を受けた作品であり、その批判の理由は、作品が部族主義的では無いことにあった。*ATD*の保留地の描かれ方も基本的に変わらない。*Alexie* は彼を批判した批評家たちを、ノスタルジアに取り憑かれた病的な人たちと捉えており、*ATD*においては保留地を個人を捕囚する牢獄と断言し、白人世界との交流を肯定的に描くことで、批評家たちの部族主義を間接的に批判する。

*ATD*が*Reservation Blues*と明らかに異なる点は、*Junior*が白人世界のReardan高校に通学することで、保留地を先住民だけに限定されることのない、普遍的なメタファーとして捉えるようになったことである。彼が白人の友人たちとの関わりを通して気づくのは、先住民だけではなく白人もまた痛みを抱えているのだということと、白人たちもそれぞれの場所また共同体に捕囚され、脱出を夢見ているのだということである。*Reservation Blues*において、共同体の利益を優先するあまりに個人を束縛し、生き延びるための語りを抑圧する場所であった「保留地」は、先住民だけではなくあらゆる人間を幽閉し、同じ価値を共有することを強要する閉鎖的な場所へと意味を変える。さらに、「部族」は血や種に関係なく様々な共通項を持つもの同士が集う多様な共同体へと意味を変えるのである。自分だけを閉じ込めていたはずのものの意味を広義に捉え直し共有することが、人種を超えた互いの尊重と共感へと繋がり、*Junior*の新しい繋がり生きる力の獲得をもたらす。さらに、多様な共同体に属するものとしての自己同定に至るのである。

第5章は*Flight*について論じた。本作は*Indian Killer*のレイシストでニヒリストな見解に対する解答である。また、9.11の報復戦に関して彼の子どもたちから受けた、戦争はなぜ続いているのかという問いに答えようと試みたものである。本章は、15歳の主人公Zitsの時空の旅において、彼がどのような体験をして何に気づくのかを分析した。そして、その気づきとその気づきから辿り着く自己同定がどういう点で*Indian Killer*に対する解答となっており、また*Alexie*の子供たちの問いへの答えとなっているのかを明らかにしようと試みた。

ZitsはJohn Smith同様に都市に暮らす孤児であり、彼と同じように孤独で何者でもないものない存在だと感じている。しかし、ZitsはJohnのように白人か先住民かのどちらかになろうとはしない。彼に二者択一的な選択肢を与えるのは、彼が少年刑務所で出会ったJusticeという白人少年である。彼に先住民の

不幸は白人が原因であり、白人に復讐すべきだと告げられ、Zits は銀行でテロ行為におよぶ。その直後に彼の時空の旅が始まるのだが、彼が旅する先には何かしらの争いがある。Zits は旅の過程で合計 5 回転生するのだが、彼が最初の 4 回で目撃するのは戦争であり、個人が組織に属した場合に、それが掲げる正義の名のもとに暴力を振るう姿である。そして彼が気づくのは、戦争が、一方が是ならもう一方は非という二者択一的な価値基準で起こるものであり、何にも属さぬ場合の個人の姿が集団に取り込まれた個人のそれと異なるということ、そして、戦争が復讐のために起こるということである。Zits は、個人的には愛し合える人々が、国家、宗教、民族、その他組織的な集団に取り込まれると、各々の正義を盾に互いに残酷になり得てしまうという、戦争という暴力についての学びを得るのである。

Zits の最後の転生先は彼を捨てて失踪した父親であるが、この転生が扱うのは、Alexie 作品の主題の一つである父と息子の問題である。Zits は父への転生を通し、自分も含め父方 3 世代の男たちの抱えるトラウマの存在を知る。祖父、父は彼同様に自尊感情を欠落しており、怒りと犠牲者意識に満ちている。Zits の何者でもないというアイデンティティ不在の状態は、祖父の代から続いてきたものであり、彼らの怒りが苦しみの原因を与えた父親ではなく白人に向けられていることは、一見個人的なもののように思われる彼らの感情の背景に、白人の入植以来、先住民が被ってきた暴力の歴史があることを示唆している。

Zits は時空の旅を終えると、彼が銃撃をしたはずの銀行を後にし、これまで隠してきたトラウマを語る。語ることはがトラウマの回復に必要であることは、トラウマ研究において指摘されているが、Zits は自身のトラウマを吐き終えた後に白人夫婦の養子となり、自分の名前が Michael であることを養母に告げる。Michael という名前は、褐色の肌と緑色の瞳をした混血の彼に母親が与えた名前である。自己を Michael だと名乗ることは、混血性を受け入れるということであろう。さらに、これまでの養家では決して自己紹介をしなかったことを考えれば、彼が養母に名前を告げるということは、白人の家族を自身の新しい家族として受け入れたということを示唆する。特定の何かに属し他を認めないことが John Smith の怒りの原因であり、また、特定の何かでなければならぬという要求が彼を苦しめたものであった。レイシストでニヒリストな *Indian Killer* への解答として *Flight* が示すのは、Zits による人種の異なる家族の受容に象徴される、人種の混淆の肯定なのである。また、John が沈黙のまま自死す

るのに対し、Zits がトラウマを語ることは、今後語りの方の主体が取り戻される兆しを感じさせる。

第 6 章は、*Smoke Signals* の考察を通して、Alexie 作品における語り直しの効果を、本作の構造的な語り直しと作中内の道具の持つ意味の書き直しの分析を通して明らかにしたものである。

Smoke Signals は、まず表現手段において、映像を使うという工夫をしている。“This Is What It Means to Say Phoenix, Arizona” という短編小説の映画化されたものが本作なのだが、この媒体を変えて語り直すということの根底には、受容者への意識が働いている。*Smoke Signals* には「先住民にとって正しい先住民像」をより多くの人に伝える意図があるのである。

さらに、作中の道具や出来事の持つ意味の変奏が作品の特徴となっている。*Smoke Signals* には作品の前半と後半でそれぞれ同じ小道具が登場する。前半では負の意味合いを持っていたものが後半では前向きなものへとその意味を変えるのである。道具や出来事に負の意味合いを持たせるのは主人公 Victor の父親の物語である。Victor は父との間に抱えたトラウマと対峙することをきっかけとして、異なる文脈において同じ道具の意味を再解釈する。負の意味合いの強かった父の過去の物語は、息子が生き延びる兆しを帯びた物語へと変わるのである。

映画の最後に、Victor の旅の伴侶であり、保留地の語り手 Thomas が Dick Lourie の “Forgiving Our Fathers” という詩を朗詠する。この詩の主語は ‘we’ であり、すべてが父を許すことに関する問いかけである。父と息子の問題は、*Flight* においても対峙された Alexie 文学の主題であり、先住民のトラウマとして考えられるべきものである。何かを語りなおす時は、語りなおす対象に対しての問いがあるはずである。この詩が想像させるのは、問いの後に生まれるであろう物語の可能性である。Alexie 文学における語りなおしは問いへ答えようとする試みであり、生き延びるために繰り返される、終わりなき行為だと考えられる。

Alexie は 9.11 をきっかけに「部族」と「保留地」について問い、再考した。そして、それらを異なる文脈の中で扱い、その意味を変奏することによって作風に変化をもたらした。9.11 以前は部族的な意味しか持たなかったものを、それまで沈黙していた先住民たちが自らの体験を通して部族を超えたメタファーとして捉え直し、それを語るという物語に語りなおすことによって、作品に変

化が生じたのである。Alexie が探求してきた先住民のアイデンティティは、人種に依拠したものからより普遍的な人間のそれと変化しつつあるのである。